

平成30年2月13日に政策秘書課職員との話です。

今年に入り、市長のお母様が103歳で亡くなられ、遺品を整理していたら、お母様が書かれた日記が出てきたそうです。

さみしい…

昭和41年の春、我が家は初めて耕運機を買いました。それ以前は、田植えの前には、家族総出で鍬を使って田起こしをしたり、近所で早くに耕運機を買った家に借りに行ったりしていました。耕運機を手に入れる前は、すべて人力で作業するしかなく、他人の力も借りないと、生活ができない時代でした。ご近所との付き合いを大切にして、ご近所に頭を下げて、互いに助け合いながら生活をしていました。母は、ずっと長いこと、そうした暮らしを続けてきました。



耕運機を買ったころ

しかし、耕運機という動力を手に入れたことで、他人の手を借りなくても生活ができるようになりました。効率的で便利な生活と引き換えに、耕運機の月賦やガソリン代を稼ぐために、市外へ働きに行くようになり、近所の人に頼んで、一緒に作業をする機会は減っていききました。

この50年間、日本中が豊かさを求めて、大人達は忙しくなりました。生産性や効率性が高いこと、能力があることに価値が見いだされ、子ども達でさえ、そうした価値観で暮らしていくことが求められる時代になりました。

母は、亡くなる前の10年間ほどは、ショートステイやデイサービスを利用していましたが、それ以前は、日中、家に一人でした。日中以外は、家族で一緒に過ごし、朝晩には「行って来るね」「ただいま」と声を掛けていました。

その頃の日記には、

「誰もいない。今日も家の中は静かだ。さみしい。」

「知り合いが亡くなった。さみしい。」

「世の中、近所が変わってしまった。さみしい。」

と毎日のように「さみしい」「さみしい」と書かれていました。

その当時、私は介護施設で働いていました。介護職員に対して、「ここに居る人は、全員さみしい思いをしている。家族は、なかなか会いに来てくれない。職員は忙しくしていて、話しかけづらい。だから職員から、ちょっと声を掛けてほしい。相手の目を見て話をしてほしい」といつも話していました。それなのに、自分の母の日中のさみしさを、どうしてあげることもできなかったことを日記で初めて知りました。ショックでした。

市内の喫茶店でこの話をしたところ、喫茶店にいた高齢の男性たちも、「今は自分の足で喫茶店に来て話ができるけれど、家にいたら、さみしいだろうなあ」としみじみ言っていました。店主は私に、「お客さんの高齢女性が、小学生から『こんにちは』と話しかけられて、うれしかったと言っていた。たったそれだけのことで、さみしい気持ちを軽くすることができるんですよ」と話してくれました。

施設に入居している人だけでなく、家族と住んでいる人であっても、高齢者のみなさんは、さみしい思いをされています。市内にお住まいの方の中には、高齢になった親と離れて暮らしている人も多いでしょう。

さみしい思いをされているのは、高齢者だけでなく、核家族で子育てをしている方も同じかもしれません。

家族だけで、さみしさを紛らわせてあげることが難しいのであれば、家族以外の方が、声を掛けたり、誘ってみたり、少しずつでもいいので、できることはないでしょうか。先日行われた南小学校区の地区社協設立総会の際、CSW（コミュニティ・ソーシャルワーカー）にも、「みんな、さみしい思いをしている」という視点も持って、地域を回ってほしいとお願いしました。

「人生100年の時代」を迎え、私達は、人生60年で設計されたこれまでの効率や能力を求める忙しい生き方から、定年後には家庭や地域で30年、40年もの時間を過ごす生き方へと大きく転換する必要があります。多くの人の生き方が変われば、ゆったりとした大らかな空気が流れる素晴らしい社会になるはずです。大らかな空気の中、互いに声を掛け合い、「さみしい」と思いながら暮らす人が、少しでも減っていくと信じています。



～市長の話を聞いて～

私も同じ経験をしたことがあります。数年前、同居している母の体調がだんだんと悪くなりました。その後、元気になった母とそのときの話をしたら、「痛みもあったけど、それよりも私はさみしかった。あなたは残業で帰ってこない。お父さん（夫）は、朝早く仕事に出かけ、夜は早く寝てしまう。家では誰とも話せなかった」と言われました。私は、「さみしい」という気持ちで、人は体調まで悪くなるんだとショックを受けました。当時の私は、残業続きで、家には帰って寝るだけ、いつもイライラしていて、つっけんどんな口のきき方をしていました。幸い母には友人が多く、気にかけてくれる人が周りにたくさんいましたが、それでも「私は、さみしかった」という気持ちだったことを聞いて、「母に悪いことをしたな」と思った記憶があります。

それから数年が経ち、母が「さみしい」と言ったことを、私は忘れかけていました。「同じことを何度も言わないで！」ときつく当たってしまい、「親に対して、どうしてこんな言い方しかできないんだろう」と自分が嫌になるときもあります。親から、「他の人には優しいのに、私達にはキツイ言い方しかしない」とたしなめられることも多いです。

どうしても「家族だから」という甘えがあるので、家族では、かえって難しい部分なのかもしれません。そうであるならば、地域に暮らすみんなが、お互いさまの精神で、自分の親以外の高齢者や子育て中の方に、ちょっと声を掛けることをすれば、さみしい思いをしている高齢者や子育て中の方を少しでも減らせることができるのではないかと思います。